

## 動物の境界に関わる思想

## 人間とは何かを定義すること

### フォントネ『動物たちの沈黙』

ユダヤ／キリスト教：すべての動物は人間に奉仕するために創られた。

動物と人間の境界は絶対的である。

ピュタゴラス派：人間の魂は動物へと転生する。両者の間に固定的な境界はない。

### 動物機械論

人間の苦しみは原罪＝楽園追放に基づく

動物には原罪はない

ゆえに動物は苦痛を感じない

ゆえに動物の「悲鳴」は自動的に発せられる音にすぎない

動物が苦痛を感じているように見えるのは見せかけである

モーパッサン『女の一生』に登場するジャンセニスト：出産中の牝犬を踏み殺す

### 動物の解放（シンガー）

ほとんどの動物は（軟体動物も？）苦痛を感じる。

最大多数の最大幸福（功利主義）に基づくなら、動物に苦しみと屈辱を強い殺すことは許されない。少なくとも工場畜産によってもたらされる獣肉、家禽、卵、乳を摂取することは反倫理的である。徹底的な菜食主義を実践せよ。

自らの「思想」の正当化のために、動物を論理的操作子として利用することは、生活世界からの遊離（上空飛行）である。

動物と直接関わる経験に還帰せよ。動物に「思いを籠めよ」

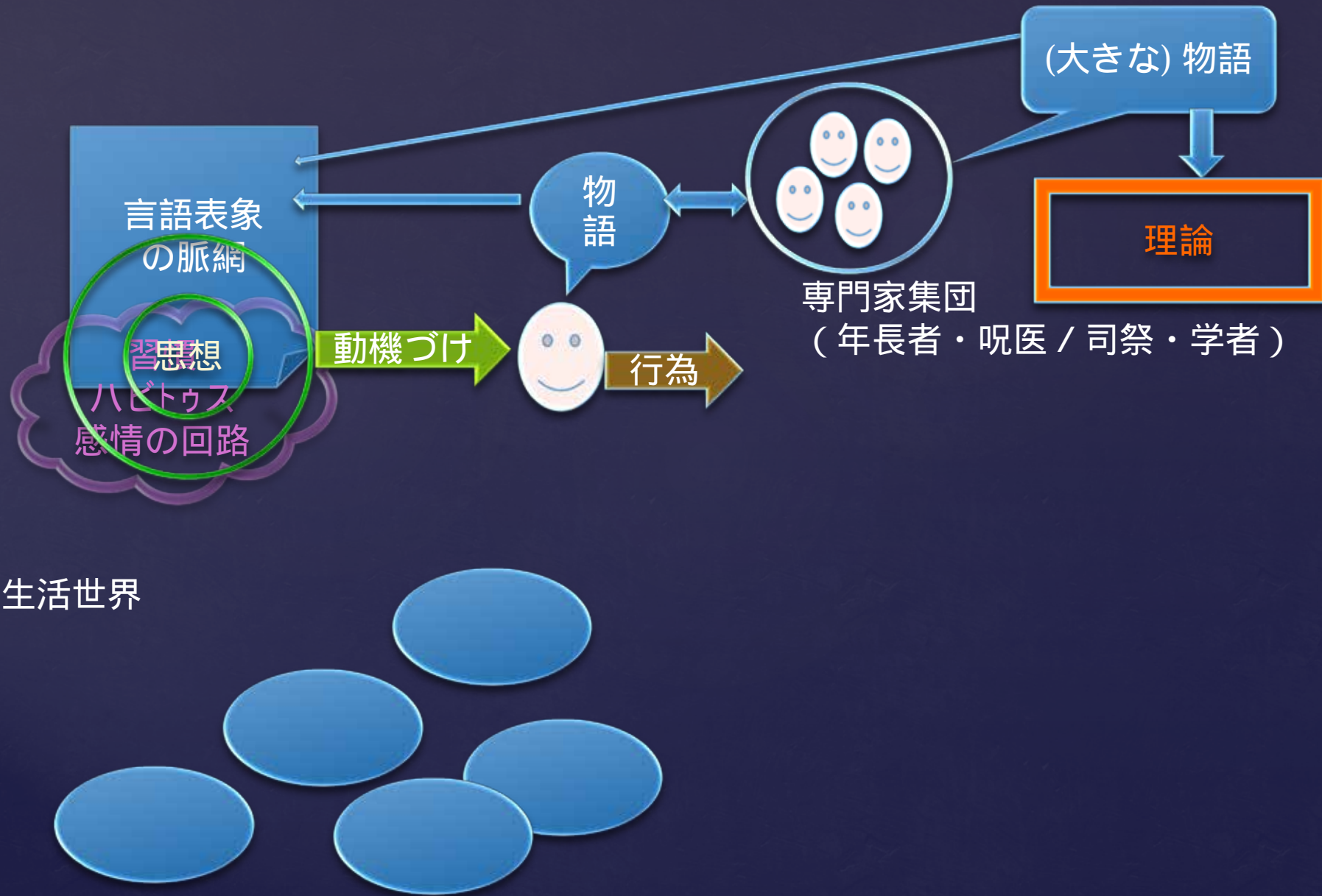
ジョギング中に、車に轢かれた、ヘビ、カエル、イモリ、カマキリなどの死骸を見る

「胸の痛み」

côõ-sà koam : 「痛みを感じる」

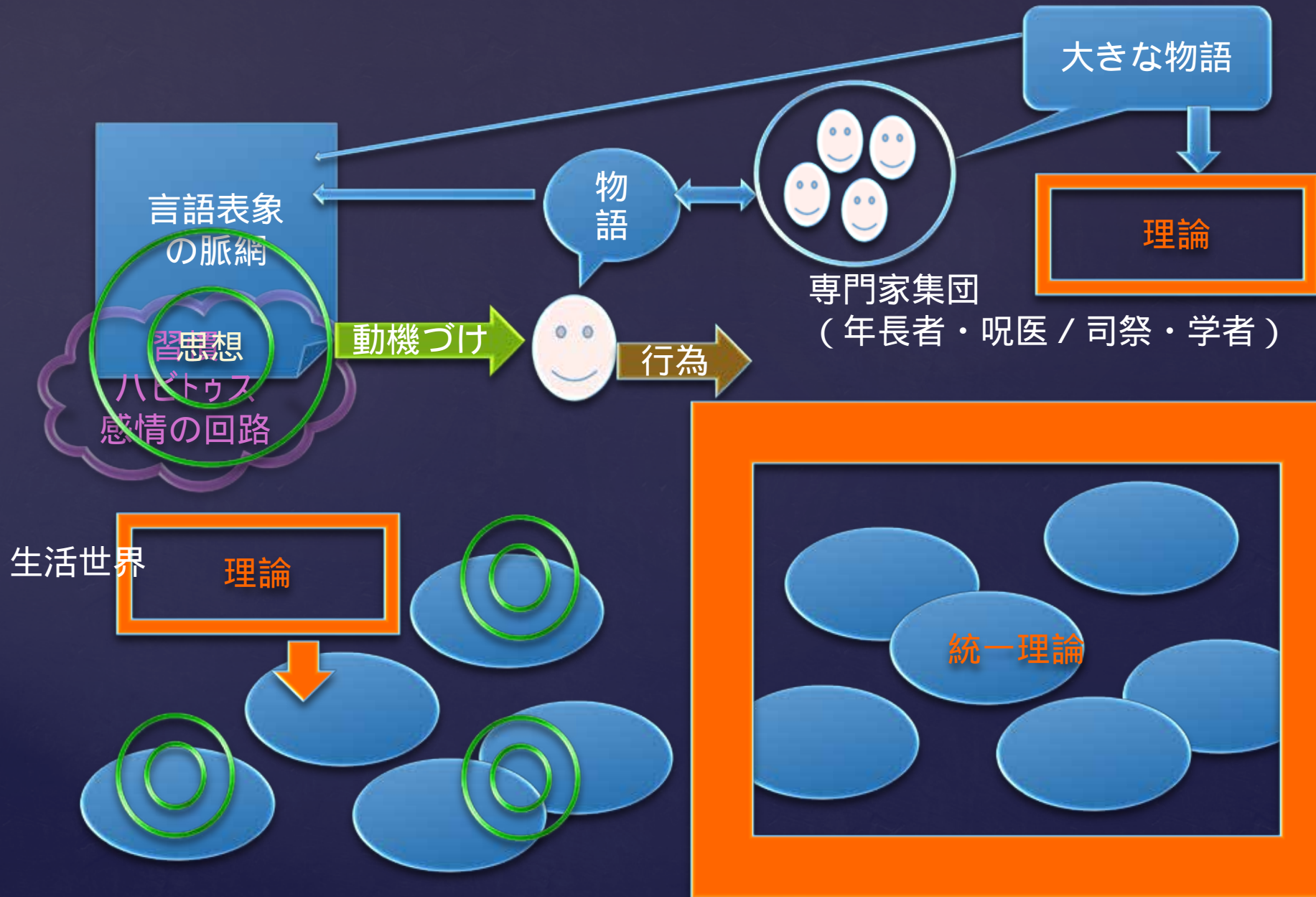
痛み-PGN (3/f/sg/acc) 感じる [=聞く、味わう、嗅ぐ]

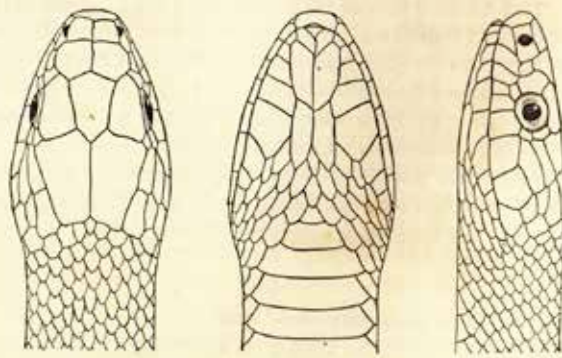
# 思想・物語・理論——掘っ立て小屋を建てる試み——



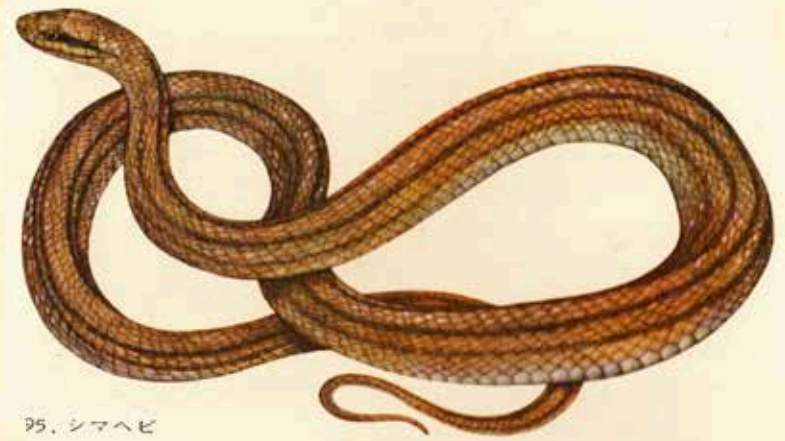


# 思想・物語・理論——掘っ立て小屋を建てる試み——

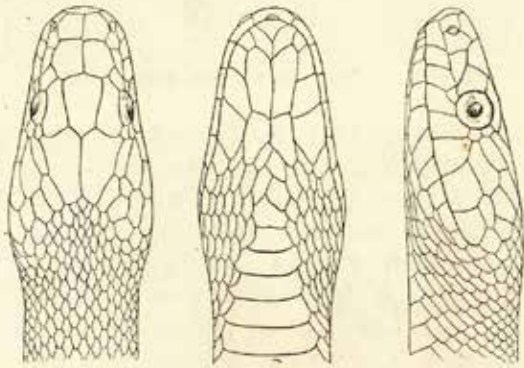




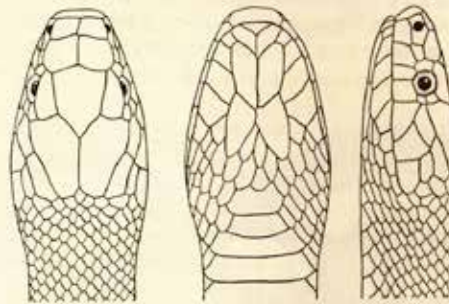
第 23 図. シマヘビの頭部：左から右へ背面、腹面および左側面。



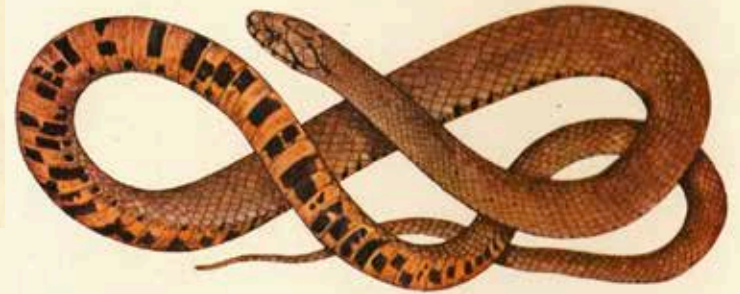
95. シマヘビ



第 27 図. アオダイショウの頭部：左から右へ背面、腹面および左側面。



第 24 図. ジムグリの頭部：左から右へ背面、腹面および左側面。



96. ジムグリ



101. アオダイショウ



97. アカジムグリ





112. ヒビカリ



第 108 図、シロサダサの頭部：左から右へ背面、腹面および左側面。



109. シロマダラ



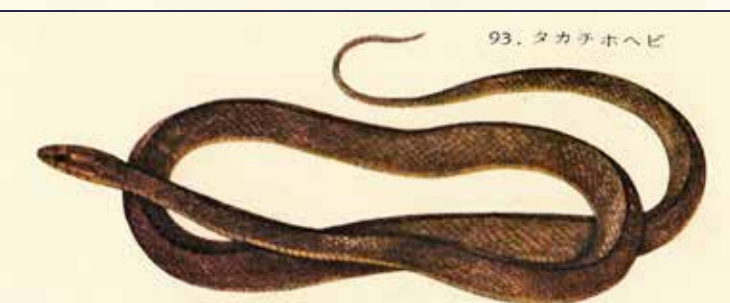
115. ヤマカガシ



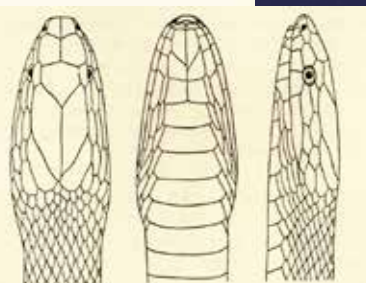
第 110 図、ヤマカガシの頭部：左から右へ背面、腹面および左側面。



第 114 図、マムシの頭部：  
上：左側面；下：背面。



93. タカチホヘビ



第 112 図、タカチホヘビの頭部：左から右へ背面、腹面および左側面。



127. マムシ





1982年、原野のキャンプでジャッカルの仔

みんなでニシキヘビを罠り殺しにしたあと

SG：どうして捨てるんだ？

C：ゲームは |komeを殺すことを禁じている

SG：いや、食わないのか？

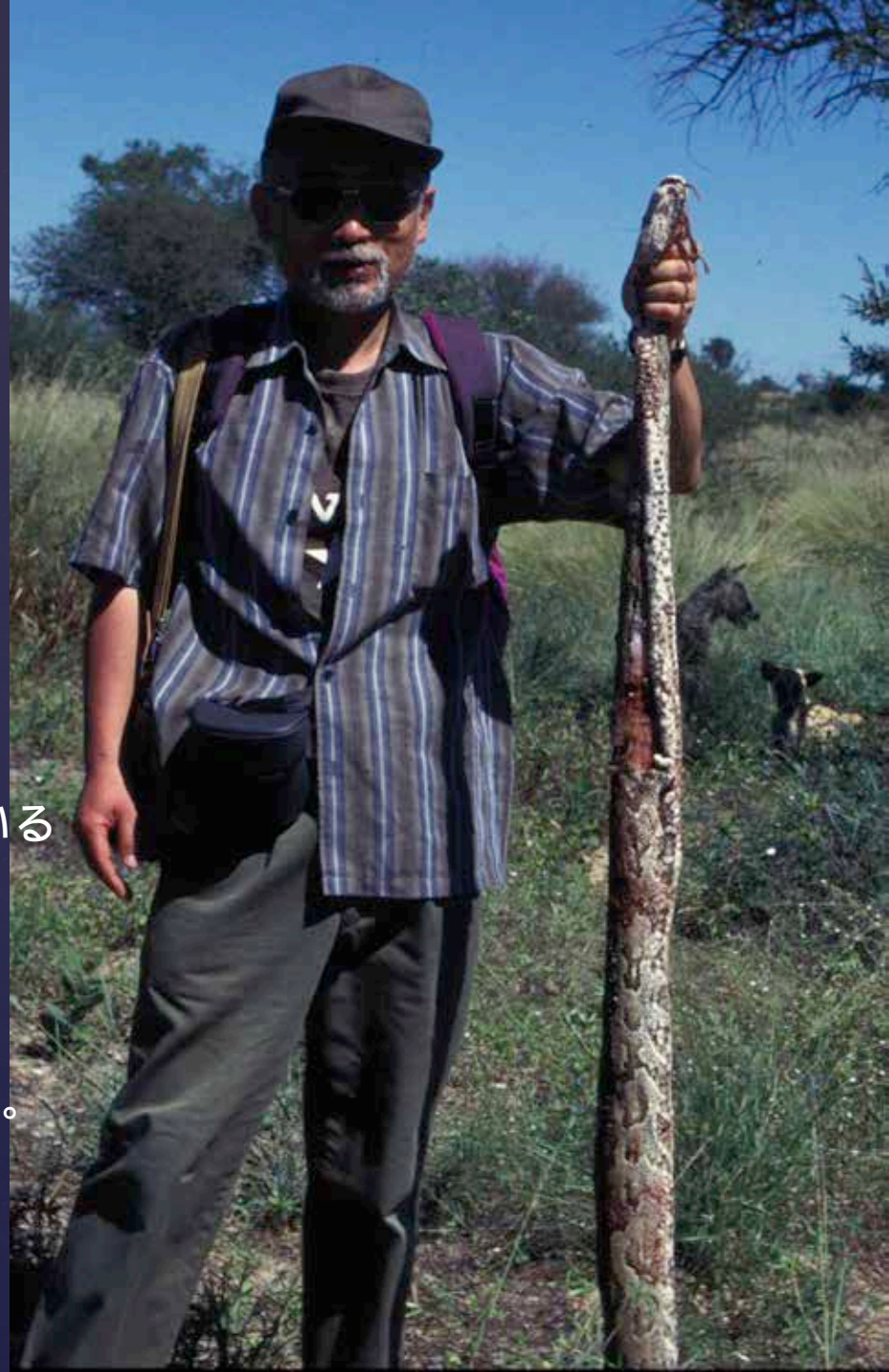
C：今、おれたちのキャンプの年長者で、  
ツォメを食う男はいない

SG：じゃあ、どうして殺した？

C：アエ、おれたちは昔からそうしてきた。  
じゃあ、おまえが食いたいのか？

SG：.....

C：おやスガワラは黙ってしまった  
(一同爆笑)



グイは喜々として、目を輝かせて動物を殺す  
彼らは「痛みを感じて」いないのか？  
何度かの誘導尋問 「心が良いのさ！」

わたしが動物に「思いを籠める」とき しばしば「胸の痛み」に襲われる  
とくに、「一家皆殺し」の報に接すること

感情レベルでのすれちがい 殺しへの負い目の感覚の（完全な？）欠如  
にもかかわらず、人間と動物は限りなく同じ存在と捉えられているようだ...

メタレベルの思想

世界は、わたしは、なぜこのようなのであるのか？

理論

始原の物語

神話 / コスモロジー  
宇宙論  
進化論





ダチョウ | gě ro

ダチョウだけが「火」を持っていた。  
ピーシツォワゴ（glamaの  
神話世界でのあだ名）が  
それを盗んだ。

彼が前もって撒いていた  
カウキャカバ（ライオン  
ゴロシ）の棘で足を裂かれ、  
ダチョウの足はこんなふう  
になった。



始原の物語では、「動物人間」が闊歩し、躍動する。

高い知性をもった食肉目のふるまいはある種の敬意と共に語られる。  
「人間のように…」 ハイエナ、ヒョウ、ライオン、ミツアナグマ

グイの思想のコア：人間と動物は徹底的に連続している。

だからこそ、殺しはわくわくさせる経験なのか？

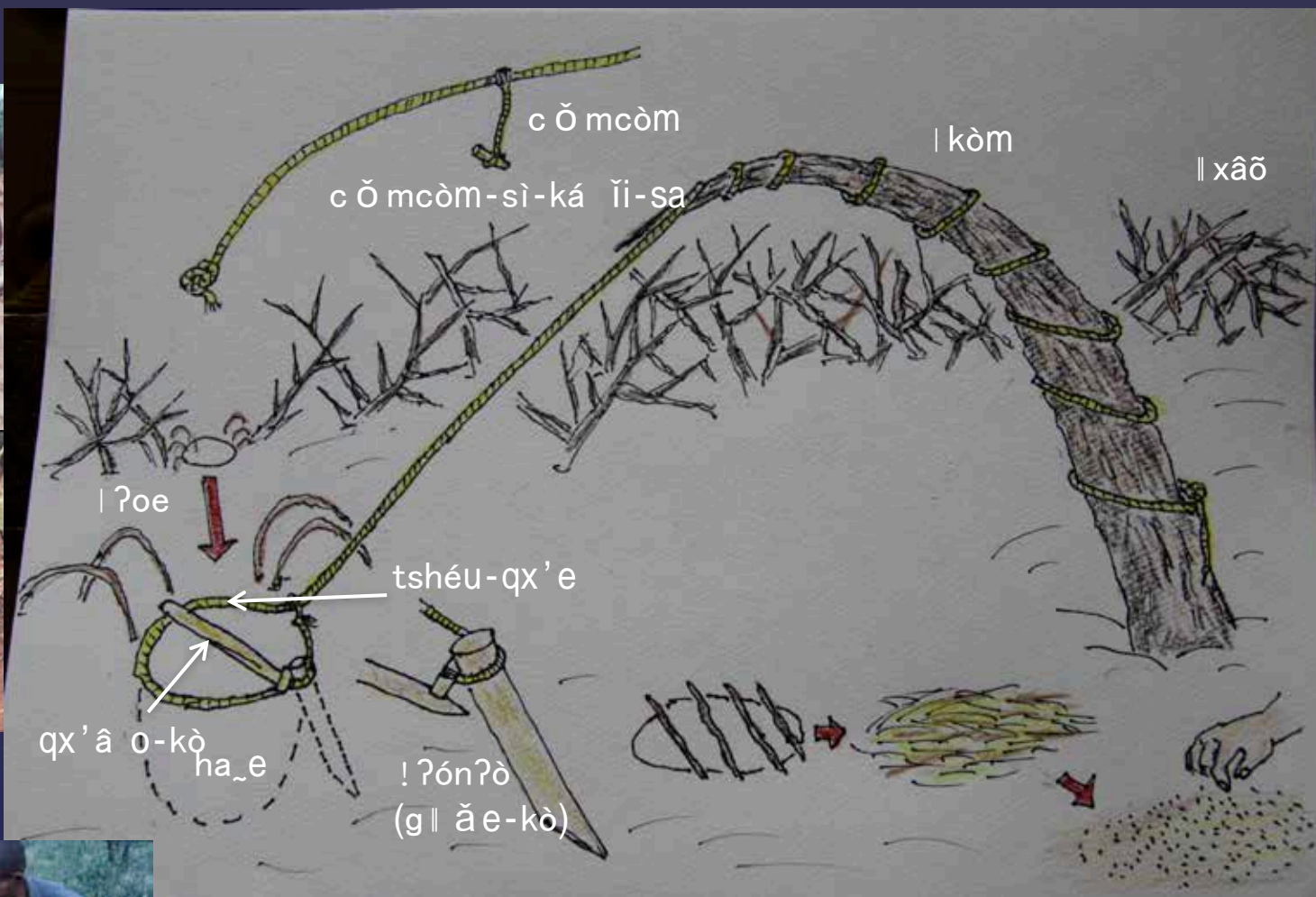
cf. イロンゴットの首狩り：「おまえと同じ人間である俺たちがなんでそんなことができるって思うんだね？」 「同じ人間ならだれでもよいのだ。同じ人間だからこそ、首を狩る[ことに意味がある]。

身を養う技術としての火[起こし棒]

殺意の体現としての罨：反コミュニケーション



はね罨 (g!úi)



tsx' àn	罾木の根元を掘り棒でズンズン叩く
l kě me	罾木に罾紐を巻きつける
l q ǎ ro	獲物が踏み抜く

# 経験主義者の毒舌：存在論的転回批判

北方狩猟民のハンターの前には獲物が自ら姿を現す。 動物との互酬性  
しかし、それを文化表象（殺しの負い目に由来する虚偽意識）とみなす  
ことを禁じる理由はない。

人間が動物に変身する。ただし夢の中で。羊頭狗肉というべきではないか？

変身に関わるグイの思想

サソリ イモムシ（食用）

セミ タマムシ（食用）

カリユドバチがチョウの幼虫を運ぶ

親が子を運んでいるのである

オタマジャクシは水が干上がるとともに  
全滅する

巨大ガエル（食用）の出現

小さいカエルが雨と一緒に降ってくる

P：オタマジャクシはカエルになる。

～ P：オタマジャクシはカエルにならない。

2つの世界の境界はどこにひかれるか？

もしその境界を確定できるなら、日本のオタマジャクシを  
境界を越えてカラハリに持ち込める：存在論的な排中律違反。





# 『千のプラトー』以降....

原著刊 1980年 フランス現代思想の速さ、極東の遅さ

スタイルの奇怪さ

cf. 「肝心なことはもはや議論することではなく、かえって、ひとが自分に割り当てる問題のために議論の余地なきいくつかの概念を創造することである。創造行為に対しては、コミュニケーションが到来するのは、いつだって早すぎるのか遅すぎるのかのどちらかであり、**対話は、つねに余計なものである。**」 (D&G 1991)

**反コミュニケーション**：罨 魅惑されるか、回避するか

しかし、コミュニケーションの手前ですでに現存し魅惑または反撥を掻き立てることこそ身体の特長ではないのか？

巨大な身体としての言説に遭ってしまう出来事

分析哲学的な論証と現象学的記述双方からの訣別 / 制度化された知を離脱せよ

## 第10章「一七三〇年 強度になること、動物になること、知覚しえぬものなること」

ある 此性 の思い出.....人称や主体。あるいは事物や実体の個体化とはまったく違った個体化の様態がある。われわれはこれを指して 此性 *heccéité* と呼ぶことにする。ある季節、ある冬、ある夏、ある時刻、ある日付などは、事物や主体がもつ個体性とは違った、しかしそれなりに完全な何一つ欠けるところのない個体性をそなえている。( p. 300 )

きみたちにはある一日、ある季節、ある一年、ある人生などの個体化がある（それは持続とは無縁である）。また、なんらかの気候、一陣の風、霧、蜂や動物の群れなどの個体化がある（それは規則性とは無縁である）。( p. 302 )



## 経験主義による批判への再反論

「オタマジャクシの変身をじっと見届ける」ことをしない、という身構え  
その「真理」を彼らに論証しようとしないという「私」と彼らの関係性

スガワラがいくぶんなりとも彼らになっ**ている**からこそ、カラハリにおいては、  
わたしにとってさえも、オタマジャクシはカエルにならないのである。

だが、少なくとも「極東」の人類学者である「わたし」が、「多自然主義」に  
追従することは、不徹底な身構えである。

現象学的実証主義に踏みとどまったまま、「進化」をわたしの思想の問題として  
引き受けることは可能か？

「自らからけっして切り離せない」経験としての胸の痛みに再び還帰する。

# ヒョウのこと―関係論者に与して―

1. 罅り殺しをめぐって：穴に逃げこんだヒョウを焼き殺した。  
キャンプの周りをうろつくヒョウが、たびたびヤギや犬を襲った。追い詰めたら、穴の中に逃げこんだので草をたくさん詰めこんで火をつけた。

- -「死んでるなんて嘘じゃないか！なんてざまにやつは焼きあがってることか！ 焼けて焼けて焼けて、やつの模様はなかった。やつはただ炭みたいに真っ黒だった。でっかいやつが、目も見えなくなって、よろよと出てきたんだ。「コッコッコッコ」  
と喘いだ。俺たちは『喘ぐなよ』と叫び、背を向けてみんなちりぢりに逃げた。振り返って見るともう動かなくなっていた。『ワイ、あいつはもう死んでるよ。』  
引き返すと、ヒョウは真っ黒くなって横たわり、前足であたりを掻いていた。

わたしはなぜこの語りに「むごたらしさ」を感じたのか？

「火」を馴致することは本来、身を養う技術であった。殺しの道具ではない。

ヒョウへのわたしの特別な思い：「もっとも美しい動物」 上野で過ごした長い時間



「さあ片づける」と監督はいい、断食芸人は藁ごと埋められた。しかしその檻のなかには、一頭の若い豹がもたらされた。あんなに永いこと荒れはてたままだった檻のなかを、はずむようにこの猛獣が動き回るさまを見るのは、どんなに鈍い感覚の持ち主でも、気分の一変する思いだった。[中略]自由ですら、それを失って悲しんでいるようには見えなかった。必要なものはちきれそうなほどすべてそなえたその高貴な身体は、自由をもいっしょにもち運んでいるみたいだった。自由は牙と歯のどこかにはさまっているみたいだった。生きる歓びがその喉の奥からはげいしい灼熱となってほとばしるので、観衆たちがそれにたえることは容易ではなかった。しかし彼らはそれをも克服し、檻のまわりに群がって、いっこうに立ち去るけはいを見せなかった。(了)

----三原弟平(2005)『カフカ『断食芸人』 わたしのこと』みすず書房。



それにしても、なぜ、わたしはカフカのヒョウを想起したのか？：生の偶有性

同じゲノムを具えた単一「種」としてのヒョウがカラハリにも動物園にも存在しているという信念は上空飛行である。だが、動物園のヒョウが文化的に構築されているなどと言うのは愚かしい。極端に言えば、罠り殺しを免れたヒョウが日本に移転され、少年のぼくを魅了したという想定さえ可能だ。二つの存在論の間にリジッドな境界があるわけではなく、身体は異なる関係性（制度化）の場へと連続的に移動しうる。



## ヘビふたたび：エホバの証人の思い出.....

神を信じない者たちは  
邪悪な動物たちと  
同じく永遠に呪われる  
のです



ある理論にコミットすることは、生活世界を満たす微視政治闘争の問題になる。  
退屈な理論より、面白い理論のほうが、わたしを魅惑する。



## リトルネロ（リフレイン）

ジョギングのあとの思い出.....

私は、天満宮のベンチに腰掛けて煙草を吸っていた。樅の木のてっぺんでカラスがちょっと変わったトーンで鳴いた。長いインターバルを置いてまた鳴く。何か奇妙に感じ、耳を澄ましていたら気づいた。比叡山の方角、何キロも離れた所から、応えて鳴いているカラスの聲がかすかに聞こえたのだ。たしかに、私は少しずつ、変わりつつある（きょうまで、そんなことには気づかなかったのだから）。

「.....カラスの群れの話です。彼らは朝から晩まで空を飛びまわり、トウモロコシや穀物を盗んだり、光り物を探したりして、満ち足りた生活を送っていた。そんなある日、たまたま湖の上にやってきて、静かな湖面に映った自分たちの姿を見るんです。その上で急降下したり、舞いあがったりする姿のなんと力強く、優美なことか。そんなふうにしてしばらく遊んでいたが、やがて飽きてきて、今度は湖をからかい始める。.....」

〔ジェス・ウォルター『市民ヴィンス』（田村義道訳）：175、ハヤカワ文庫（2006）〕

## リトルネロ（続き）

伊谷純一郎『高崎山のサル』

彼らの声はじつに多様である。／わたしは、まずそのひとつひとつを.....

森林の中にいる一匹のサルにとって、群れというものは、あるひろがりのなかから聞こえてくるさまざまな音声の束ではないだろうか。

わたしになしうるもっとも強力な刺激を群れに与えること.....  
群れを完全に混乱におとしいれ、そこから彼らが、どうして秩序をとりもどすかを見たかった。.....群れの後尾に突入した。わたしと平行して走るやはり大きなサルが一匹いた。.....クマイチゴの太い枝を、わたしは走りながら鎌できった。その枝がわたしの頭上をふわりととんで、うしろに落ちるのが見えた。

吉良竜夫の思い出.....

よれよれの汚れた学生服を着たやせ型で、.....藁草履をはいていたような気もする。  
ときどきポケットからドングリらしきものをつまみ出して、ポリポリとかじっている。  
.....

〔吉良の妻〕「あんな学生さん見たことない、びっくりするばかり」



ル・クレジオ『調書』のアダム・ポロとどこが違うのか？

しかし、おそろしく多いぞ。多いぞ。まだ通ってゆく。こんなにたくさんいたのか。  
おそろしく多いぞ。一匹も見のがすな。

.....

もうすこした。頑張れ。いまやめたら、すべてが水の泡だぞ。これはたいへんな  
群れだ。たいへんな群れだ。

夜、目をふさぐと、たくさんのサルがあらわれた。.....この幻覚のサルたちから  
のがれるために、もう一度ノートを取りだした。その現象が、私の体系の中で、  
安住することのできる理論を考えだしたり、.....

動物の社会に構造があり、その構造に接近できるという確信。  
それは、地球を覆う「単一の世界」の一分節ではないのだろうか？

ある生物学者の思い出.....

彼の別荘の周りにはムクドリの仲間が飛来する。毎年、8月下旬の決まった日に  
群れがいっせいにワタリを開始することに気づく。いったい何が彼らをそうさせる  
のか？ いろいろ考えたあげく、日照時間がある長さを下回ることしかない、と  
結論する。

鳥が去って行く「この日」.....かけがえのない単独性、だが、それは規則性に繋がって  
ゆく.....

カラハリで

魅惑される

母国で

「動物の境界」に関  
わるグイの思想

わたし

「動物の境界」理論  
としての進化論



13 December 1978

10:48 私はKグループを追跡していた。上流から来たGグループと遭遇。数でまさるKがGをじりじりと上流に押し戻す。私は、Kの中からGへと位置を移動する。その途端、私の存在に力づけられたかのように、Gは勢いを盛り返し、Kを下流へと一気に押し戻した。

そのとき、私は、ヒヒたちが私を「仲間」と見なしていることに初めて気づいた。





## 自然誌家の夢想

カラスにはカラスの世界がある。人間は、自然誌的記述によって、その世界の構造のいくぶんなりともを知ることができる。それは、私たちの社会が可能にした、一つの潜在可能性である。わたしがもし鳥類行動学者だとしたら、わたしは、今よりもずっと生き生きとカラスの歓びを想像することができるだろう。

もし、そのわたしが、カラハリでムナジロガラスやツルハシガラスの研究をしたら、カラス=妖術師の物語に魅惑されながらも、同時に、「カラスはこんな風にザークするんだぜ」とキレーホに語り聞かせることができる。きっとキレーホは目を輝かせて、おもしろがるだろう。そのとき、わたしとキレーホを隔てる境界は攪乱される。

自然主義へのやみくもな敵視、または多自然主義は、こうした対話の可能性を閉ざす。現地では、「額面どおり人類学者」を装い、母国に帰ったら、そこを支配する生政治にひたすら順応することは、端的に自己欺瞞（悪しき信仰）ではなかろうか。

## 具体的な提案

進化論が仮想するような単一の生命の連続のなかに人間も動物も共に参入している、という「仮説」にいつも胸をさいなまれながら、人間社会の記述を続ける。認識の徒（思考の専門家）がすべきことは、人間社会の記述を自然誌化することであり、それと同時に、動物社会の記述を「哲学化／思想化」することである。インタラクション・スクールに連なる霊長類学者が今やろうとしているのは、後者である。還元論と客観主義に屈服せずに、それを行いうるはずだ。

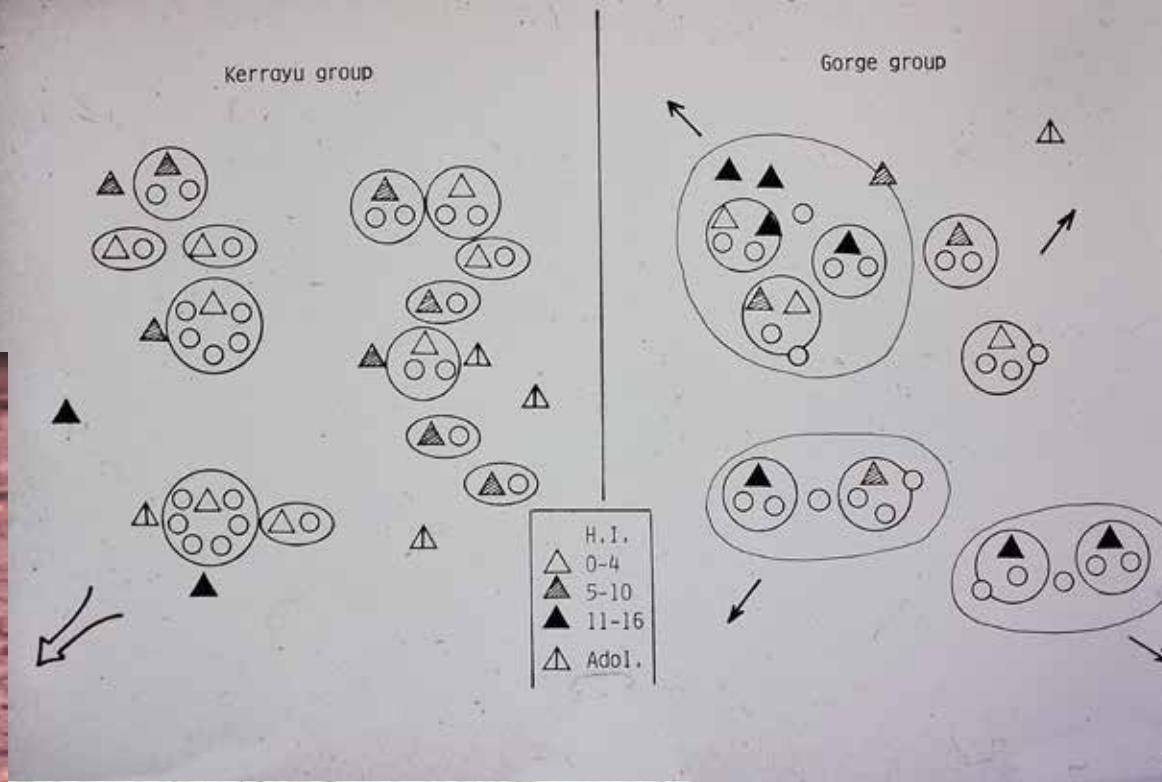
We have never been dualist!







pair unit in the K-group



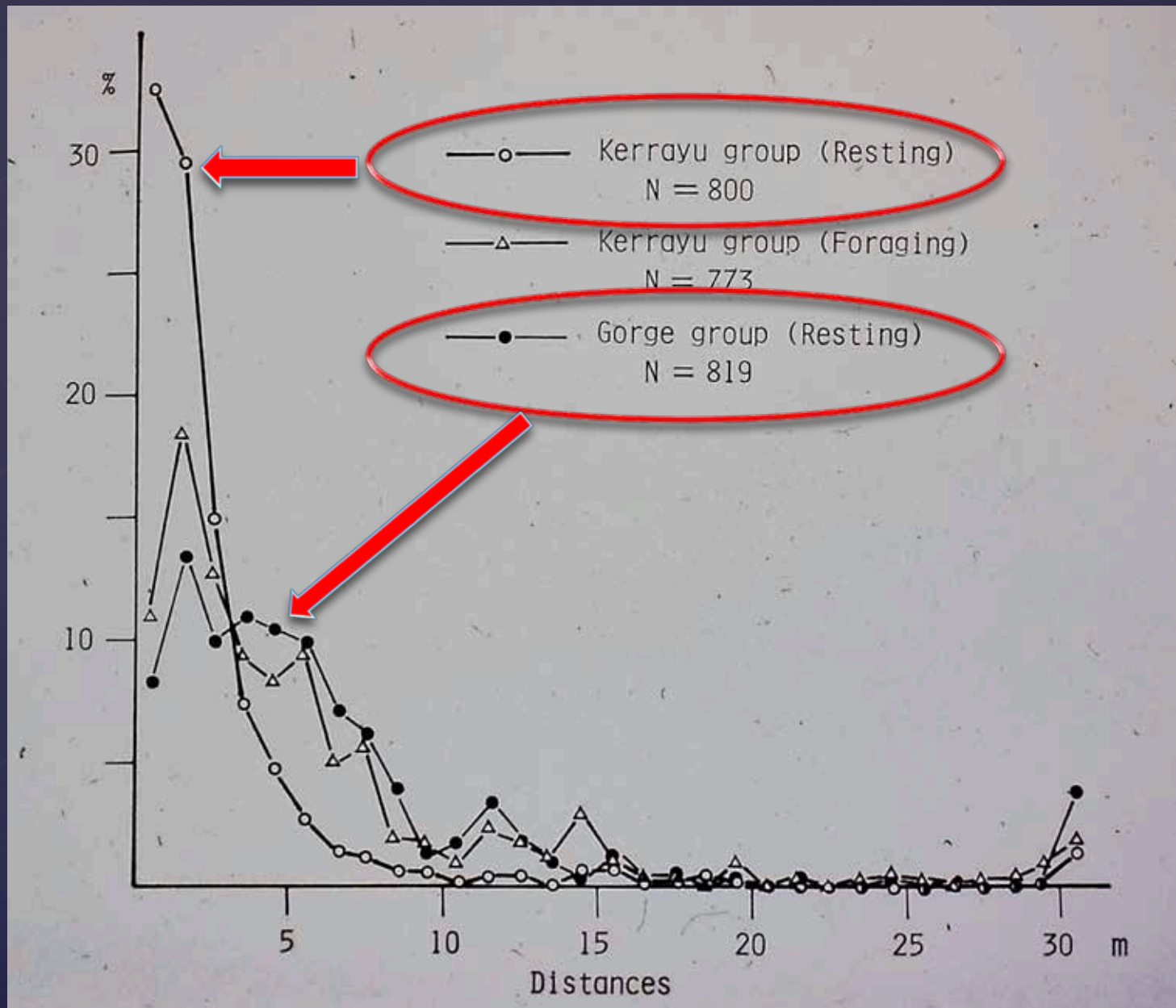
one-male unit  
in the K-group

**Table 6.** Correlation between the hybrid index of each male and the mean number of females possessed by him per day

Name of male	Hybrid index	Number of female	
		range	average
<i>Geta</i>	2	5-7	5.64
<i>Yabelo</i>	2	1-7	5.20
<i>Nigus</i>	2	-	2.00
<i>Stav</i>	2	0-2	1.32
<i>Hakeem</i>	3	1-2	1.22
<i>Posta</i>	3	-	1.00
<i>Uzo</i>	4	1-2	1.35
<i>Kusil</i>	4	1-2	1.09
<i>Jirat</i>	5	1-2	1.13
<i>Villa</i>	5	-	1.00
<i>Zefen</i>	6	2-4	2.47
<i>Tadji</i>	6	-	0
<i>Djoro</i>	6	-	0
<i>Igir</i>	6	-	0
<i>Feres</i>	8	0-1	0.65
<i>Doro</i>	9	1-2	1.45
<i>Quonta</i>	16	-	0
<i>Louis</i>	16	-	0

The mean number of females per day was obtained by dividing the accumulated number of females possessed by each male throughout the study period by the total number of observation days (91 days). Adolescent bachelor males were excluded from this analysis.



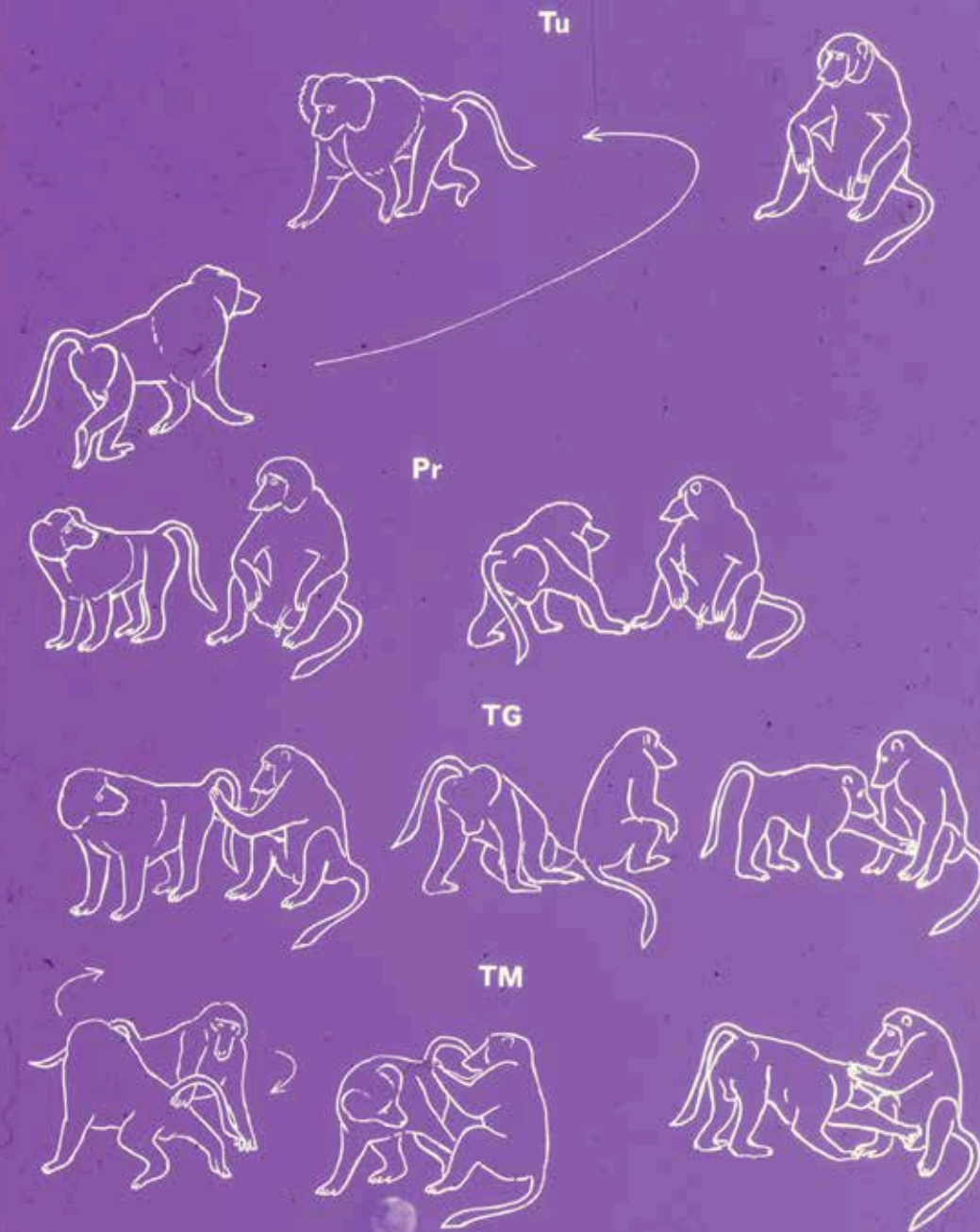


The G-group could be observed only in the resting situation.





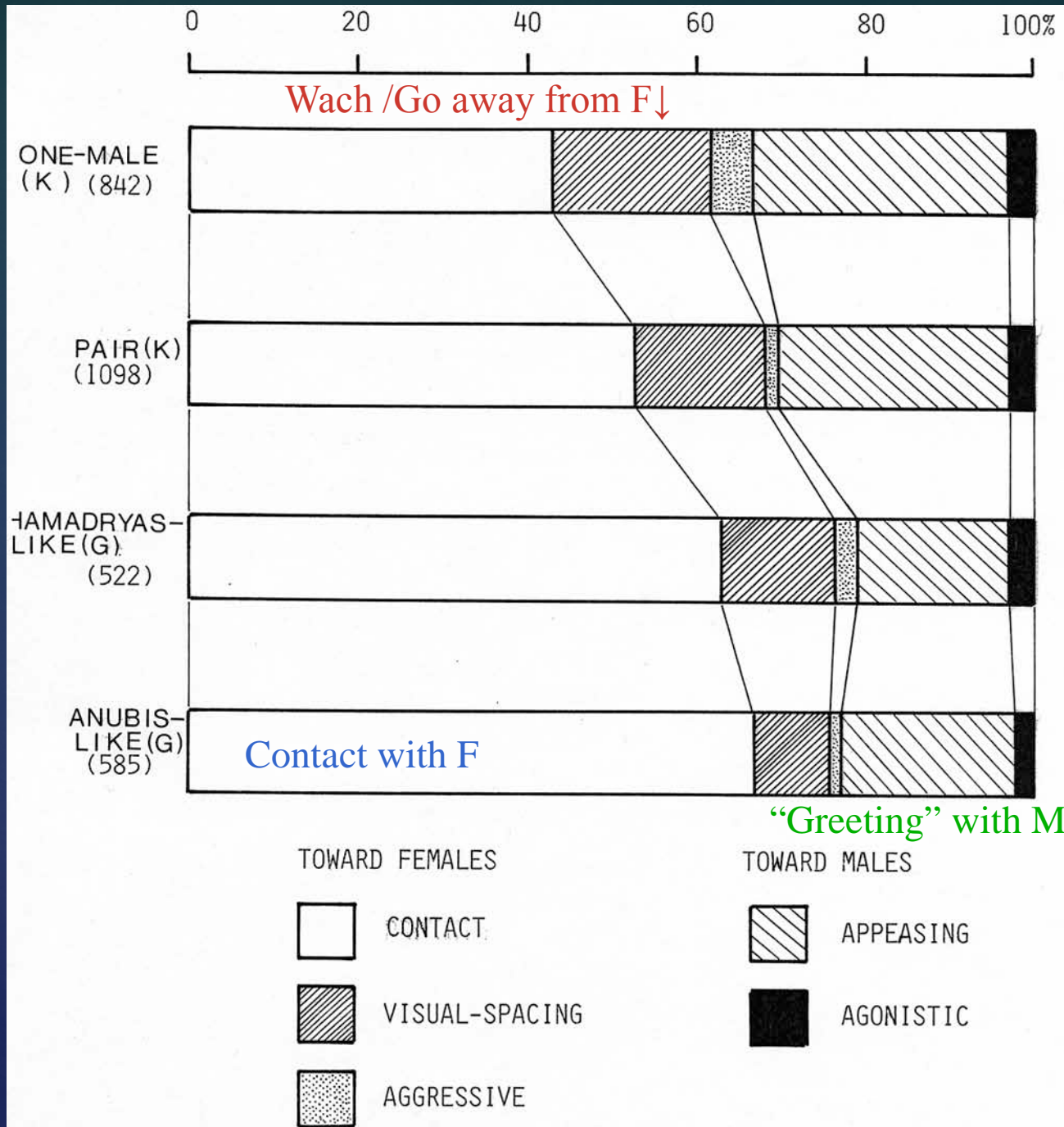




presenting



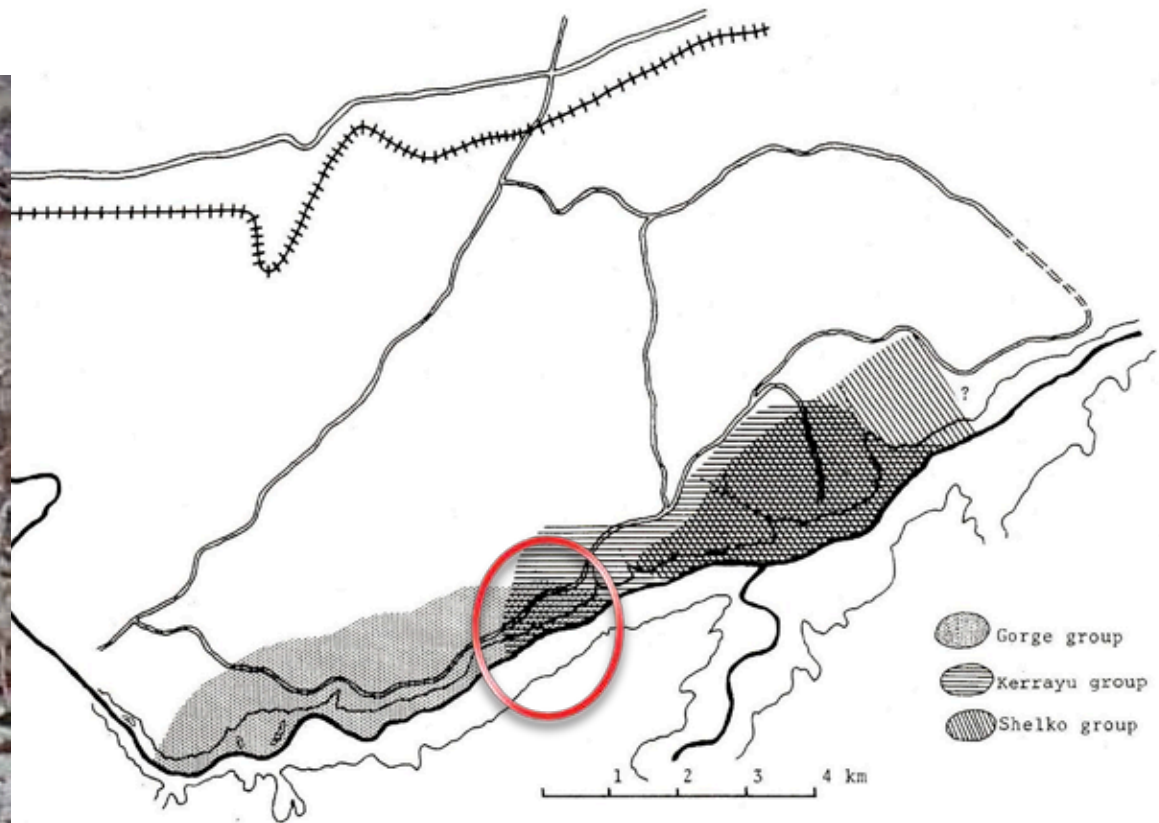
mounting



K-group:  
Originating from  
hamadryas band

G-group:  
Originating from  
anubis troop





Estimated outlines of the home ranges of 3 hybrid groups. The outline for the Kerrayu group was based on recorded routes of the nomadic movement of this group, while those for the Gorge group and the Shelko group were estimated by connecting together points where the observer met each group. The downstream area within the range of the Shelko group was rarely surveyed.

Group encounter



13 December 1978

10:48 On the savanna, an adult male, Doro, and an adolescent male, Bal, of the K-group, who had been walking on the periphery of the traveling party, began to chase one adolescent male, Kire, of the Groge group which had approached from upstream. The skirmish caused almost all of the members of the K-group to begin gathering into a body on the downstream side so as to confront the animals of the G-group which was lining up on the upstream side at an interval of about 30 m.





10:51 The K-group began to march forward upstream, while the G-group began to retreat slowly.



11:05 I shifted my position from near the K-group to within the G-group. (I needed to check who were there, because the G-group was usually undergoing frequent joining and parting of subgroups.) This appeared to encourage the animals of the G-group, since they immediately began to march towards the K-group and the latter in turn retreated.

